From Vanuatu

# ヴァヌアツ だより

―― みなみのしまより ――

青年海外協力隊員
高野　元美

No.21

## ラニ！（こんにちは）

♪　ナイ　バガ　リボーク　シュシュシュ
　　アタフナーベ　ナフ　ガニキナウ　♪
（歯をみがこう　シュシュシュ　食べたあとに）

ふつうのバヌアツ人の家には、ふつう、１～２個、歯ブラシがあります。（やたらと大きいのが）
それは、大人がお出かけ前にみがくためのもの。食べたあとに歯をみがく習慣は、ありません。自然の恵み、芋、果物、だけを食べていた頃は、それでも問題はなかったのですが、今、お店に行くと、色々なものを売っています。現金収入がある＝お菓子が買える、学校の先生や病院のスタッフの子どもの歯はボロボロ。教養のあるはずの人の子どもが―。皮肉なことです。

食生活が変わってきている今、歯の健康に関心を持ってもいいのではないかと、村の診療所の看護婦に相談。一緒に幼稚園を回ってみることにしました。

その日は、子どもと一緒に、お父さん、お母さんにも園に来てもらい、まずは一人一人虫歯チェック。
そして、歯磨きのうた、虫歯になったトム君の話。実際に歯みがき、ブクブクうがい。
最後に、看護婦が、お母さん、お父さんに歯の健康について話しました。

この国で、歯の治療というと、“抜く”のみ。痛ければ、抜く。いったん悪くなったら、どうしようもないという訳。だからこそ、予防が大切なのですが、今回の巡回でどこまで効果があったのか?!
こういうことは、繰り返し続けていくことが肝心。現地の園の先生と看護婦が、毎年やってくれると、効果があるはず。しかし、続くかどうかは　　？？？　です。

今回の巡回歯みがき指導は、私もとても楽しかったけれど、看護婦は、歩くのにつかれたらしく、おくれる（これぐらいは許そう）。勝手に予定を変える（変えたら、私にも知らせてよ）。ついにはすっぽかす!!　とやってくれました。
そんなことに疲れたということを最後に申し添えておきます。

（1997.9）

From Vanuatu

# ヴァヌアツ だより

―― みなみのしまより ――

青年海外協力隊員
高野 元美

No.22

## ある朝のできごと ―

目が覚める。外では、誰かが庭を掃いている。多分、お父さんジョンマックだろう。時計を見る。まだ6時前。今日は土よう日、仕事は休み。さて、今日は何をしよう。ちょっと考えてみる。部屋の片付けかな、やっぱり。あ、でも、朝、電話をかけに行くというのもいいな。（ちなみに電話まで歩いて1時間）じゃあ、起きなきゃ。歩くときは、早朝に限る。暑くなるからね。

トイレと水汲みのため、外へ出ると、弟マヌエルが「お客さんだよ」と言う。誰だ？まぁいい、とりあえずトイレ、水汲みをすまし、お湯を沸かし始める。と、ドアをたたく音。来た。

「モトミ、頼みたいことがある」 顔を見ただけで、この話の切り出し方だけで、大体のことは想像がついた。私の物が、何か欲しいのだ。
「モトミのラジカセが欲しいんだけど」 やっぱり!!
「あ、そう。でも、ラジカセは、某幼稚園の先生が買うことになってるの。もうお金も払ったよ。」と、半分ホントで、半分ウソを言う。
「えっっ!! 誰？」
「ある先生」
「誰？」
「ある先生。この辺りの」
「誰？」としつこく聞くが、私も答えない。
ということだからと、私が立ち上がると、
「モトミ、別のラジカセを注文することはできないか？」
**ハア?!** 私は、自分が2年間使ってきたものを売っているだけであって、私は電気屋じゃないんだよ。でも、一応、聞いてみた。
「日本からってこと？」
「そう」
「新品の電気製品を外国から持ち込むと、税金いっぱーい取られるよ」
やっとあきらめた様子。最後に、
「他のものを全部売るのは、いつ？」
「んー、11月。まだ日は決めてない。決めたら知らせるよ。」と笑顔で言う。これも半分ホントで半分ウソ。バザーに、特に何の世話にもなってない彼を招待するつもりはない。でも、きっと誰かから聞きつけて、来ることだろう。まぁ、それならそれでいい。ちゃんと払ってくれさえすれば。

気が付くと、お湯がもう沸いていた。
さぁ、おいしい紅茶を入れて、一日のスタートだ。

（1997.10）

No.23

## ある日のできごと ―　（No.22 のつづき）

さて、朝ごはんも食べたし、出かけるとしよう。
犬のナツは、もう外で待っている。帽子をかぶり、虫よけスプレーをふり、水とう、キャンディをかばんに入れて、出発。まだ、陽が高くならないから、歩きやすい。1時間の道中、会った人、3人。車は全く通らない。

電話は、あるお店の前にある。そこには、ベンチがあって、いつも大勢の人がたむろっている。さて、今日は?!　と、目を凝らして見てみる。やっぱり、誰かいる。でも、そんなに多くはない。1、2、3人・・・　まぁいいや。
「ラニー!!」「ラニー!!」と　あいさつを交しつつ、電話へ直行。みんなの熱い（？）視線を感じつつ、ダイヤル。
あっ、通じた。

「ハロー、ヨーコと話したいんだけど」
「ヨーコね、呼んでくるから、かけ直してくれる、5分後に」
5分で呼んでこれないことは、わかっていたので、「10分後」と言って、切る。

ふと回りを見ると、いつの間にか人が増えている。あるおじさんが、
「どこにかけたのか？」と聞く。無視。また聞いてくる。
「何で聞くの？」と言うと、おじさん、黙る。
ごめんなさーい。でも、こういうことをいちいち聞かれるのはつかれる、イヤなんです。

さて、10分後、かけ直してみる。あっ通じた。話し出すか出さないうちに、　**ブチッ!!**
切れた。イヤな予感。かけ直す。通じない。もう一度、ダメ、通じない―。
そのあと何度かけても、もう通じなくて、あーあ。
そう、島の電話は、調子が悪いことが多いのだ。仕方ない。誰の責任でもない。これくらいのことでは、私ももうめげない。

そして、お店に入り、焼きたてパンとチリツナ缶とキャベツ　←めったに手に入らない　を買う。キャベツが手に入っただけでも、来た価値あり。
「また来るよ」と、お店のお兄さんに手を振り、また歩き出した。

その日の無線交信で、他島の友人に、「今日はキャベツを買った!!」と自慢したことは言うまでもない。

（1997.10）

From Vanuatu

# ヴァヌアツ だより

―― みなみのしまより ――

青年海外協力隊員
高野　元美

No.24

☀　10月はじめ、幼稚園の先生のための1週間の講習会があった。そのときのできごと　―

　2日目の昼、みんなで話し合うことがあるので、キッチンに集まって下さいとのこと。私も行こうとすると、「あ、モトミはいいの」と止められた。止めたのは、ヘレン。彼女は先生たちのリーダーだ。そこで、私は、一人教室に残って午後の授業の準備をしていた。何の疑問もなかった。
ヘレンが帰って来て、「みんな、子どもみたいだわ!!」と怒っている。
「何を話したの？」と聞くと、
「ちょっとしたことよ。それなのに、こんなに時間がかかって」と。
そこでも、私は、フーン…　と思っただけで、何の疑問も抱かず、それ以上、知りたいとも思わなかった。

　夕方、帰り道、他の先生たちが昼のことを話し始めた。よくよく聞いてみると、州政府から送ってきた幼稚園のための予算で、講習会の閉会パーティーのために、牛を1頭、買うとのこと。

**え――!!**

その話は、前回の話し合いで、反対が多く、（私ももちろん大反対）1人1羽ずつニワトリを持ち寄るということで、話がついていたはず。それなのに、ヘレンが、強行に牛を買う方向へ持っていったとのこと。しかも、私を **計画的** に話し合いからはずし。ひどい、ひどい、ひどすぎる―。　こんなことって?!　やっぱり、誰のことも信用できないわ。信じられるのは、ナツ（犬）――　お前だけよ。　と、ナツを見た。

失望　――。　その言葉が頭をめぐる。
世界各国で活動している協力隊員の多くが、幾度となく味わう気持ちだろう。私は、この言葉に出会う回数は少なかった方かもしれない。

州政府から幼稚園のための予算を送ってきたのは、今年が初めてではないか。やっと政府も幼稚園教育に目を向け始めているのではないか。そんな意味ある大切なお金なのに、何故、牛なのか?!

むなしさと悲しさに包まれて、その夜は、眠る。
ベッドに入ったのは、9時だった。

From Vanuatu

# ヴァヌアツ だより

―― みなみのしまより ――

青年海外協力隊員
高野 元美

No.25

（前号のつづき）

次の朝、6時すぎに家を出た。この1週間、私の通勤時間は、片道歩いて1時間半。いつもならすがすがしい朝の空気を吸いながら… なのだが、今朝はちがう。昨日のことが、重一くのしかかっている。

朝一番に、もう一度、私の意見を言う。

- お金は、州政府から幼稚園のために送られてきたものだから、パーティーに使うのはよくない。
- お金がないのに盛大なパーティーをしたいというのは、ムリな話。自分たちでできる規模のものにしよう。

私だけ、話し合いからはずされたことは、言わなかった。その代わり、持っていたノートに、**「ヘレン、お前のことは見損なった!!」** と日本語でデカデカ書き、少しだけ気を晴らした。

結局、牛は、とりあえず買うが、再来週、みんなで持ち寄りバザーをして、その分稼いで、お金は返すということになり、私もその案で妥協した。しかし、1回のバザーで、そんな大金が稼げるなら、苦労しないよね。
しかも、その結論に行きついた理由は、「モトミがかわいそうだから」。
そうではないでしょう。ちがうでしょう。つまり、私が本当に伝えたいことは、理解されていないということ。

その後、州政府の幼稚園分野の担当者が来たので、この件に関して、意見を求めた。
「お金は、もうあなたたちのものだから、何に使ってもいい」とその人は言った。
**どうして?!** 私はもう怒りも感じなかった。

「もうやめよう…」 ボソッとつぶやいてみた。
きっと、この気持ちも、多くの開発・援助の仕事に関わる人が、嫌という程味わってきたはず。日本で、一生懸命働いている人たちに、申し訳ない気持ちになった。

本当は、こんなことヴァヌアツだよりに書きたくはなかったけれど、悲しいかな、これが現実。

（1997.10）

No.26

**ラニ！**　お久しぶりです。

　すでに皆さんご存じのように、私、高野元美、バヌアツでの青年海外協力隊としての任期を終え、12月15日より一宮保育園ももぐみに復帰しています。 遅ればせながら、**ただいま！**

　こうして無事帰国することができましたのも、皆様のあたたかい声援のおかげだと感謝しております。 ありがとうございました。

　このバヌアツでの青年海外協力隊員としての2年間が、私の心の中に、かけがえのない多くの種をまいたことは言うまでもありません。 その小さな種を大切に育て、これから私が出会う人々に分けることができるよう、しっかり自分の足で歩いていきたいと思っています。

　さて、このバヌアツだより、たくさんの方々に読んで頂けたようで、うれしく思っています。 ありがとうございました。 ご好評（ホント？）に応え、もう少し続きを出してみることにしました。 皆様、お付き合い下さいませ。

**思えば2年間、色々なことがありました。**

　今となっては楽しかったことばかり思い出されて — と言いたいところですが、実は、その逆でどちらかと言うと、悲しかったこと、苦しかったことを思い出すことが多く、胸が苦しくて…（というのは大袈裟ですが）。 バヌアツでは基本的に楽しい毎日で、一度も（日本に）帰りたいと思ったこともなかったのに、どうして今になってつらいことばかり思い出すのでしょう。

**「まあ、いいか。」のつけ ?!**

　自分なりに分析してみると、まず、バヌアツにいるときは、“バヌアツで青年海外協力隊員として活動している自分”に満足していたし、多少のことはもともと覚悟していたので、（つらいことも）むしろ隊員冥利につきる、ではないですが、それに近い気持ちで受け入れられたのだと思います。
　また、バヌアツ人に見習い、何でも「まあ、いいか」で済まし、一晩寝たら忘れ、困難に正面から向き合っていなかったからかもしれません。 でも、バヌアツではそうでないとやっていけなかったので、それはそれで良かったと思うのですが、日本に帰って来て、私の心の中もまた元の日本人らしく真面目に考えるようになったということでしょうか。 と、私事を長々と書いてしまいましたが、こうしてバヌアツだよりを続けることで、自分の気持ちの整理もできればいいなと思っています。

　私には、2年間、バヌアツで、ペンテコストで、笑ったときも、泣いたときも、怒ったときも、いつもいつも私のそばにいてくれた、すばらしい“相棒”がいました。 その“相棒”と私の話、聞いて下さい。

## 出会い、それは…

私の暮らすペンテコスト島アンルル村に、ボビーという雌犬らしからぬ名前の犬がいました。 大体バヌアツ人、なぜ犬を飼っているのか理解に苦しみます。 都会ならわかります、番犬という大切な役割があるから。 でも、こんな平和な田舎で、番犬の必要はありません。 じゃあ、犬は友だち？
とんでもない！ そこにいるだけで意味もなく蹴られ、石を投げられ、餌ももらえず、痩せて、びくびく暮らしているのがバヌアツの犬たちなのです。 犬をかわいがるほどの（お金と心の）余裕はないというところでしょうか。 まあ、日本も昔はそうだった？
ボビーももちろんそんなバヌアツ犬でした。

## 子犬誕生！

１９９６年５月、そのボビーが子犬を産みました。 もともと私は犬が嫌いではありませんでしたが、自分の意志で犬を飼ったこともなかったし、犬と親しく付き合ったこともなかったので、犬のことをよく知りませんでした。 ほえられたり、近付かれると、右手と右足が一緒に出るくらい怖くて緊張していました。 だから、それまでボビーとも全く関係なく暮らしていましたし、妊娠していることにも大して関心を持っていませんでした。

ある朝、ボビーが泥だらけになって、ふらふらしながら歩いているのを見つけました。 昨日はパンパンに張っていたおなかがぺったんこ。 あ、子犬が生まれたんだ—。 雨の中、森で子どもを産んだんだ—。 だから、泥だらけなんだ—。 子どものことが気になりながらも、おなかがすいて仕方がない様子、食べ物を探してうろうろ歩き回っていました。 飼い主の家の入り口で、ボビーはしっぽを振って長い間待っていました。 でも、出て来た飼い主に 「（泥だらけで）汚い。 あっちへ行け。」 とあっさり追い払われてしまいました。 それを目にした私はさすがにかわいそうになって、（私にとってもバヌアツ人にとっても）貴重なビスケットを数枚、ボビーにこっそりあげたのです。 こっそりと。
どうしてこっそりあげたかって？ それは、ビスケットを犬にあげるなんて、ここでは、許される行為ではないから。 だって、ビスケット1袋で、お米が1キロ買えるのです。 しかも、それは、幼稚園の先生の平均的な月給の１０分の１にも相当する額なのです。

## 生き残った強い生命

数日後、森で生まれた子犬たちが村に連れて来られました。 ボビーは私から食べ物をもらうのが日課となり、私も、自分の食事をボビーにと少し残しておくようになっていました。 しかし、それだけでは、母親としての栄養は全く十分ではなく、残念ながら、子犬は次々と死んでいってしまいました。 ここでは、強い命しか生きていくことができない、それは、犬も人間も同じこと、それが、自然の摂理、厳しさなのだと知らされました。

結局最終的に2匹の子犬が生き残りました。 やはり、雌の方が生命力が強いのでしょうか。 どちらも色は白で、１匹は顔と背中に黒いぶちがあり、もう１匹は真っ白でした。 犬をかわいがらないバヌアツ人ですが、やはり子犬はかわいいと思うのか、欲しいという人も結構いました。

ある日、飼い主が、子犬を欲しいと言ってきた人に、「その大きい方の子犬（ぶちのある方）は、モトミの犬だからあげられない」 と言っているのを耳にしました。

えっ？　この犬、私の犬って？　知らんかった…どうしよう、でも、まあ、飼ってみようかな、ということで、ある日から突然、その子犬は私の犬となったのです。
　そして、私はその子犬を“ナツ”と名付けました。 だって、ここは、いつも暑いんだもん。 ぴったりの名前でしょ?!

　私の相棒、そう、それが、この子犬ナツなのです。 何だ、犬の話？　とがっかりしないでください。 たかが犬、されど犬、これから、ナツと私をめぐる様々なドラマが繰り広げられていくのです。

---

No.27

**ラニ！**　犬を飼うと、毎日、散歩しなければなりませんね。 これが結構大変ですよね。 その点、バヌアツでは、犬は放し飼いなので、散歩の必要はありません。 でも、やっぱり犬。 飼い主と一緒に散歩するのは大好きです。 だから、ナツはいつも私と一緒に歩いていました。 どこに行くのも一緒、仕事に行くのも、買い物に行くのも、海に行くのも、教会に行くのも。

ここは田舎なので、道で会うとみんなとあいさつを交わします。 そして、「どこに行くのか？」とたずねあいます。 ナツと歩くようになって、さらに質問が増えました。「それは、モトミの犬か？」「名前は？」と。

## 超有名犬、ナツ！

外国人がいない所なので、私はもちろん、超有名人でしたが、その私の犬ということで、ナツもまた、またたく間に、超有名犬となりました。 10キロ以上先に住んでいる人にまで、ナツは知られ、どこを歩いても、「ナツ…、ナツ…」。 何ヵ月ぐらいしたら、みんなが私とナツに飽きるかなあと楽しみにしていたのに、6ヵ月たっても、1年経っても、そして、ついに2年たっても、やっぱり、「モトミー」「あ、モトミが来た！」と言われ続けました。 ありがたいことなのですが、まあ、時には疲れます…。

さて、前号にも書きましたが、バヌアツの犬たち、ちゃんと餌をもらえることはまずありません。 もちろん、食べ物が余ればもらえるのですが、余らないのです、これが。
家族が多いうえに、みんな、好き嫌いなく、何でもたくさん食べるので。

## 毎日、毎日、芋・・・

バヌアツ人の主食は、芋。 おかずは、アイランドキャベツという濃い緑色の大きな葉を煮たもの。（キャベツと名がついていますが、いわゆるキャベツとは全く違います。） 毎日毎日食べます、芋とアイランドキャベツを。 肉は特別なときにしか口にすることはありません。 鶏も牛も豚も貴重な財産。 お店に行っても缶詰の肉しか売っていません（冷蔵庫がないので）。 それも（値段が）高いので、そうそう頻繁には食べられません。

そんな食事情なので、私もナツに十分な食べ物を与えることはできませんでした。
大体、肉食動物の犬が、芋やアイランドキャベツを喜んで食べる訳がありません。
でも、犬も大好きな味付けがありました。 それが、ココナツミルク。

## ココナツミルク…　もういやだ

　ココナツミルク…、バヌアツに来て間もない頃は、おいしくいただいていました。 しかし、毎日、毎日、同じ味…。 夕方、ココナツミルクを削るガリガリという音が聞こえて来ると、あ、またか…。 半年たったころには、もう十分！　頼むからやめて！　と叫びたくなっていました。 それでも、毎日、毎日、ココナツミルクは続くのでした。

　バヌアツ人はもちろん、ココナツミルクが大好きです。 たまに、ココナツミルクが入ってないとき、「ごめん、今日はココナツミルクが入ってなくて」と申し訳なさそうに言います。 いいよ、いいよと、私が笑顔になるのは、言うまでもありません。 ハハハ…。

（次号へつづく）

一宮保育園　高野　元美
（青年海外協力隊バヌアツ派遣）

No.28

**ナツ** が超有名犬になったころ、任期終了間近の先輩隊員がペンテコスト島にやって来ました。 体育教育の普及を主な活動としていた先輩は、ペンテコスト島の小学校で、体育の模擬授業をしました。 授業がないときは、海で泳いだり、先輩がお土産に持ってきてくれたうどんを食べたり、私も楽しい時をすごしました。 回りに日本人がいない、しかも単調な毎日を送っているので、たまにこうして人がたずねて来ると、とてもうれしくはしゃいでしまいます。

さて、その先輩が帰るという日、その日は朝から雨でした。

## 野っ原空港

バヌアツの国内線の飛行機には、10人乗りと20人乗りとがあります。 小さいので当然よく揺れます。 また、国内に空港は30ヵ所くらいありますが、その内、アスファルトで舗装されているのは、3ヵ所だけ。 あとの空港は、ただの野っ原。 飛行機が来ないときは、近道に人が横切るのはもちろん、牛がのんびりと草をはんでいたり、時には、サッカーの試合が行われていたり。 私の暮らすペンテコスト島のサラ空港も、もちろんそんな野っ原空港でした。

## エンジントラブル！

先輩が乗る飛行機は、11時半。 その1時間前に、空港に行き、チェックインを済ませました。 その間も雨は激しく降り続き、「今日は揺れそうやね」「欠航になったりして」と心配しながら私達は待っていました。
定刻、11時半、まだ来ません。 定刻を30分過ぎても、1時間過ぎても、1時間半過ぎても、まだ来ません。 もうすぐ、2時間が過ぎようとしています。 空港の人に聞くと、前の空港でエンジントラブルを起こしているとのこと。（飛行機は、いくつかの空港を回ってくるのです、バスみたいに。） えっ… 本当に今日は帰れないかも。

遅れること約3時間、「あ、飛行機が来た！」 バヌアツ人は、目も耳もいいので、私が全然見えもしない、聞こえもしないうちから、飛行機が近付いていることに気付きます。 エンジントラブルも解消したらしく、飛行機はやってきました。

## スリップ事故！

その時は、雨は上がっていましたが、風が強く、風にあおられて、飛行機がふらふらしているのが見えました。 さあ、着陸、と、その寸前、飛行機は大きく傾き、左翼が地面にすれすれになりました。

**危ない！**　とみんながどよめく中、飛行機は無事着地したかのように見えました。 が、いつもと何かが違う、あれ？　ナ、ナント、飛行機はどんどん、私達がいる空港の建物（ただの小屋）に向かってくるではありませんか！

**逃げろー！**

その飛行機がスリップし、ぐるっと360度回転し、止まるのが目の端に入って来て、私達は逃げるのをやめ振り向きました。

（つづく）

---

No.29

（前号からの続き）

みんな何が起こったのか、呆然として動けない状態でした。 が、空港の職員と数人の男性が飛行機に向かって走ったのに続いて、私達も、スリップして止まった飛行機に向かって行きました。
けが人が出たかもしれない、どうしよう…。

空港の職員が、ドアを開けると、真っ青な顔をしたバヌアツ人乗客が次々と降りて来ました。 けがをした人はいなかったようで、とりあえずは安心。 次は、飛行機を、滑走路（と言ってもないのですが、とりあえず空港の真ん中）に戻さなければなりません。 この時、パイロットが二人乗っていたので、一人が操縦し、一人が翼を押して、滑走路への復帰を図りました。 始めは、こりゃ、無理じゃないか、と思ったけれど、さすが、プロ、何とか移動させました。

パイロットが降りて来て、 **さあ、出発するよ** とのこと。 **ちょっと、滑っただけだ。大丈夫** と自信満々、しかし、多くの乗客が、まだ恐怖からさめず、乗りたくない、と不安を訴えました。 パイロットは、**「私だって命はってこの仕事してるんだから」** と、かなりの興奮状態にありました。 その迫力に押されて、渋々、乗客は飛行機に戻り始めました。

でも、さすがに、このサラ空港から乗ることになっていた乗客は、全員、キャンセルしました。 先輩ももちろん乗りませんでした。 その日は金曜日だったので、次の飛行機は月曜日までなかったのですが、とても、こんな飛行機に乗ることはできませんでした。

実は、このようなことは、よく起きているようで、航空会社もいちいち事故として取り上げていないようです。 その半年後、1997年1月、私が乗っていた飛行機も、雨の日、スリップ。 **しかも、同じパイロット。**

飛行機のドアが飛んでいる途中で開いて、自分でドアを押さえて乗って帰ってきたという話、飛んでいる途中で、片方のプロペラが止まったという話、日本の常識ではちょっと考えられないことが、ちょくちょくあるのです。

そう、確か、ゆりぐみの植野保母がバヌアツに来たとき乗った飛行機も、着陸寸前、急にエンジンをふかしたりして、ちょっとこわい思いをしたことでした。 そのときのパイロットは、とてもかっこいいバヌアツ人初の女性パイロットだったのですが…。

## 墜 落 …

　１９９７年９月頃から、飛行機のトラブルが度々ニュースで聞かれるようになりました。 飛行機が動かなくなって、途中の島で、乗客もパイロットも一夜明かしたとか、エンジンが燃えそうになったとか、深刻なトラブルが続いていました。

　そして、ついに、１１月末、その女性パイロットが操縦していた１０人乗りの飛行機が、エマエ島で離陸直後に墜落したのです。 幸い死者はありませんでしたが、パイロットも乗客もかなりの重傷を負い、ニューカレドニアの病院に入院しています。（バヌアツの病院では不十分なため） 実は、その飛行機に、パプア・ニューギニアから来ていた協力隊員が乗っていて、彼がおりた直後の事故だったのです。 ぞっとする話です。

　飛行機嫌いな人には、ますます飛行機に乗るのがいやになりそうな話で、申し訳ないです。 でも、まあ、日本の飛行機は、こんなことはないので。

　さて、我が相棒ナツも飛行機に乗ったことがあるんですよ。
その話は、また今度…。

---

From Vanuatu
バヌアツだより
―― みなみのしまより ――
一宮保育園　高野　元美
（青年海外協力隊バヌアツ派遣）
No.30

## 楽しい園生活

私とナツは、どこに行くのも一緒！　当然、仕事に行くのも一緒で、ナツも毎日幼稚園に行ってました。 幼稚園では、部屋に上がり、私の後ろで寝て、外で遊ぶときは、子どもたちと一緒に走り（時々はしゃぎすぎて、子どもを泣かせてたけど）、おやつを食べるときは、残り物がもらえるまで、じっと座って待つという、楽しい園生活を送っていました。

## 旅は道連れ、ナツも道連れ

私は、ペンテコスト島北部にある17つの幼稚園を巡回していました。 歩いて3分の幼稚園から、丸1日歩いてやっとたどり着くという幼稚園まで、距離は様々でしたが、交通機関がないので、ひたすら歩く、歩くの毎日。 遠くの幼稚園まで歩いて行くとき、やはり旅は道連れ、ナツと歩けば、けっこう楽しいものでした。

今日の話は、ラフーシーという村の幼稚園に行っていたときのこと。 その村まで、私の家から歩いて、小1時間。 毎日、テクテク、もちろんナツと一緒に歩いて出勤。

そこの幼稚園、子どもの数は10人足らずなのですが、まあ、これが、どうしようもないのです。 先生が話していても、みんな好き勝手にしゃべったり、立ち上がったりしているし、先生は先生で、自分の子どもにおっぱいを飲ませながらだし…。 やっていることは、毎日、毎日、同じこと。 アルファベット、数字、曜日、月、形、色のお勉強…。 ただただ、大声で先生の後に続いて繰り返すのみ…。

私もわかっていました、こういう幼稚園があるからこそ、私が来ているのだと。 こういう先生にこそ、少しでも技術を伝えて、子どもたちが楽しく過ごせる幼稚園にしなければ…、頑張らなくては…と自分を励ましてはみるけれど、正直なところ、ハア…これではダメだとため息の毎日。

でも、たった一つ救いだったのは、幼稚園の先生の講習会には、必ず参加してきていたし、そこで習った歌やあそびは、一通り、実践していたということ。 だから、やる気がないわけではないと思うのです。 それに、子どもに教えることは好きだと言っていたし。 それにしても…　ねえ。

バヌアツには幼稚園の先生を養成する学校も資格もないので、ふつうの村のおばちゃん、お姉ちゃんが、今日から “先生” になります。 先生のレベルはバラバラで、こちらが感心させられるくらい、よくやっている先生もいるのですが、このラフーシーの先生のような人もいるのです。

まあ、未熟でも、やる気さえあれば、好きという気持ちさえあれば、希望はあるはず。

子どもと一緒に過ごすことは、楽しいことなんだよ、保育の仕事は楽しいんだよ、ということに気付いてもらえればと。 講習会でも巡回指導でも、先生も子どもと一緒になって、あそぼう、楽しもう！　と。 先生のいいところだけ、見るようにして。 ダメなところを見てたら、お互いイヤになるからね。 そんな毎日… だったのです。

ある日、このラフーシー幼稚園で見たくないものを見てしまいました。 さて、それは、何でしょう？

そ、それは、2ヵ月前になくなった私のクレヨン…。
どうして、ここにあるの？

（次号につづく）